

渦語り (十三)

文・小西 一三
絵・小西 由紀子

漕船造り その②

カラフトでは海の船をこしえていた。一生けん命に働く優秀な船大工だと御上から賞状ももらったども、終戦になってまた天王に帰ってきたわけだ。

御山の官木は、ますます手に入りにくくなっていだな。官木が手に入った頃はな、男鹿の山で倒した木を北浦まで下ろし、そこでイカダに組んで船で船越まで引っぱって来たもんだ。当時、船越には木挽きが五人もいだよ。俺も木挽きに頼んでいだども、どうしても木挽きの都合がつかね時に自分で挽いだごがある。あれは難しいし、大した疲れるもんだ。木挽きの仕事というのは実に大変だと思っただな。

後半は、ほとんどプラスチックの船

戦後しばらくするとプラスチックの船を造るところがでてきた。官木が手に入らねので、俺は他県の工場さ見学に行ってみた。木の船に比べればペラペラに薄い。こんたのすぐぽっこれるべ、と言ったら、工場の人がハンマーを渡して「おもいっきり、ただいでみれ」って言うんだ。俺はおもいっきり、ぶんなぐった。それでも、ぽっこれねがったものな。考えを改めて、俺もプラスチックの船をこしえてみるごどにしたんだ。

プラスチックの船は軽いが速度は出だ。木の船は重い

がら速度は出ねども安定性はある。言っちゃ悪いども、プラスチックの船こしえるのは木の船よりずっと簡単だ。ペニヤで型こしえて、プラスチックをガンガン塗れば出来るもの。あれだばオナゴでも出来る仕事だ。

あの船が流行だしたころは注文がいっぱあつてな。俺はそれこそ何日も寝ねで仕事をしたもんだ。早く渡せば、それだけ漁師も喜ぶ。俺はよその船大工より仕事は早えがたし、まじめにやった。それこそ八郎漕中の漁師が俺の工場さやって来たもんだ。

俺は職人だも酒は飲まね、タバコもふがね。悪りごどもしねで、ただただ船をこしえてきた。今でもよ、昔船をこしえてやった漁師がよ、「船大工いだが」って言いながら家さ来てけるごがある。俺のごど覚えでだけで、たずねで来てければ、やっぱりおもしろいよな。



木挽きに
使ったノコギリを持つ伊勢谷敬蔵さん。
シャキッと伸びた背筋、八十三才には見えない。